



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	江戸時代前期における儒學者の朱子學と陽明學の受容に関する考察 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	関, 雅泉
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13402号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74490
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Yaquan_Guan_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 関 雅泉

学位論文題名

江戸時代前期における儒學者の朱子學と陽明學の受容に関する考察

・本論文の観点と方法

本論文では、江戸時代前期の儒學者における朱子学と陽明学の受容の実態を究明するために、藤原惺窩の『大学要略』、林羅山の『大学諺解』、林鷺峰の『論語集注私考』、中江藤樹の『文武問答』、熊澤蕃山の『大学和解』『大学小解』『論語小解』を中心資料として取り上げて、朱熹の『四書章句集注』や『朱子語類』、王陽明の『傳習録』などと比較しながら、具体的な解釈を分析し、これまで朱子学派とされている惺窩、羅山、鷺峰、そして陽明学派とされている藤樹と蕃山がどのように朱子学、陽明学の注釈を受容しているのか、その実態を考察したものである。

・本論文の内容

第一部「朱子学派」では、第一章から第三章まで、藤原惺窩、林羅山、林鷺峰の「大学」と『論語』に関する解釈について考察を加え、第二部「陽明学派」では、第四章から第六章まで、中江藤樹、熊澤蕃山の「大学」と『論語』に関する解釈について考察を加える。

第一章では、藤原惺窩の『大学要略』を中心として、明代三一教主林兆恩の解釈と対比しながら、惺窩の思想について考察している。「明明徳」について、惺窩は林兆恩の朱熹批判を継承し、「刑」と「兵」という強制的手段によって秩序を実現する必要があると主張する。「親民」について、惺窩は民を養育するという意味もあると説く。さらに、朱熹のいわゆる「新民」の解釈にも理解を示し、朱子学と陽明学を折衷する見解を示す。「格物」については、林兆恩の説を踏襲して、心の中の物欲を去ると解釈する。「致知」については、心に思慮がなく、虚霊な状態になると解釈したが、楊龜山と朱熹の説も是認することを指摘している。

要するに、惺窩は林兆恩の説を全面肯定して引用しているわけではない。その解釈には、朱子学と陽明学を折衷する傾向が見える。単純に前人の思想を複製したのではなく、独自の見解を持っていたことを明らかにしている。

第二章では、藤原惺窩の弟子林羅山の『大学諺解』を中心として考察を加える。『大学諺解』は、朱熹『大学章句』に関する解釈書であるが、その内容を具体的に分析することを通じて、程朱学を尊ぶ羅山の思想には、心学的色彩や朱王折衷の傾向もあることを指摘している。例えば、「新民」については、羅山は朱注に忠実に従うが、「明徳」を「心の名」と解釈し、「至善」は「心」にのみ存在するという心学的解釈を示す。また、「格物」については、「格」を王陽明のように「いたす」と訓み、形而下的な「物（気）」は「事（理）」に先立つという見解を示し、明代の気一元論の影響を受けて、朱熹の理気二元論を放棄するに至ったと指摘している。羅山は王陽明を批判しながらも、「良知を致す」という解釈を採用し、「知行合一」を説くと指摘している。

従来、羅山は師匠の藤原惺窩の没後、元和七、八年（1621、1622）に王陽明の理気論から離脱し、朱熹の理気二元論へ定着したという説があるが、その後の寛永七年（1630）に成立した『大学諺解』では、王陽明の説を批判しつつも、その影響を受けていたことを確認し指摘している。

第三章では、林羅山の三男鷺峰の『論語集注私考』を中心として、彼の『論語』解釈について考察する。『論語』の四つの章を取り上げて、朱熹の解釈と比較しながら、鷺峰の『論語』解釈の特徴を明らかにしている。鷺峰は林家の継承者として、その思想や学風は父羅山から大きな影響を受けている。彼は朱熹「論語集注」に基づいて『論語』を解釈する一方で、明代の著作に対して強い関心を示し大量に引用するのが、顕著な特徴であると指摘している。また、引用した明代の著作に

は、清代の儒学者から批判された著作が少なくない指摘している。これによって、日本における明代の著作の受容及び日中両国の学問上の差異を窺い知ることができ、鷲峰は朱子学一尊主義で經学を解釈したが、羅欽順ら明代の朱子学者の気一元論の影響を受けていたことを明らかにしている。

第四章では、中江藤樹『文武問答』を中心として、文武論、軍法論、臣下論を検討し、藤樹の政治論及び執筆時の思想の特徴について考察を加える。さらに、孝論と政治論との関係性について、『翁問答』を取り上げて確認している。

藤樹は文と武とを国を統治する政治的な概念とする一方、文道を偏重する見解も示す。軍隊の統率者にとって軍法は必要不可欠なものであるが、儒家の心学を学ばなければならないとし、心を重視する傾向が見て取れる。人材登用については、人材の適材適所の配置を提唱する。また、『孟子』の「良知良能」説に依拠して、愚痴と不肖にも良知良能があるとする一方、朱熹の説によって、人を精と粗に分け、統治者と被統治者の身分を固定させる。

孝を重視する藤樹は、『孝経』における周代の身分階層をそのまま日本の身分制度に当てはめ、孝を治国における中心的な原則とする。さらに天地万物は、心の中にある孝徳から創り出され、その徳の中にあるものであるという陽明学的見解を示す。藤樹の孝論が、陽明学の影響を受けていることは否定できない。

藤樹は道德を基準とする朱子学的修己治人論を是認する一方で、明代の著作を読むことを通じて陽明学に傾倒していった。藤樹の政治論には、君主の徳を重視する朱子学的統治論と孝を重視する陽明学的徳治論とが混然一体となっている。

第五章では、熊澤蕃山が著した『大学和解』と『大学小解』を中心として、藤樹の学問に対する蕃山の評価を検討した上で、師中江藤樹の思想と比較しながら、誠意と致知について蕃山の解釈を考察し、蕃山の思想の特徴と学問の形成を解明している。『大学』について蕃山は藤樹の解釈を継承する。まず、『大学』の定本に関しては、蕃山は藤樹と同様に、王陽明が唱えた古本を定本としているが、朱熹の「大学章句」に従って經文と伝文を区別する。次に、彼は藤樹の説を踏襲し、「誠意」の意を孔子が絶ち切った「私意」と解釈する。また、「致知」について、蕃山は藤樹のように「致良知」という言葉を使って解釈しないが、同じ旨意で解説する。さらに、朱子学と陽明学の違いに関しては、藤樹に従い、朱子学に批判を加えず、朱王折衷的な姿勢を示すと指摘している。

第六章では、蕃山の『論語小解』を中心として、存在論、人性論、修養論、統治論及び時所位論について考察を加えている。蕃山は江戸時代初期の陽明学者として知られているが、『論語小解』では朱熹の「論語集注」及び朱子学を基準として編纂された『四書大全』を参考にして支持する姿勢を示す。

存在論については、蕃山の理、気、心に関する解釈は朱熹の理気二元論を踏襲するが、主体としての「我（人心）」を重視する傾向が見られる。人性論については、朱熹と同様に気質の性に清濁、動静の異なりがあると考え、すべての人が平等に良知を持つので、学習によって聖賢になれると主張する。修養論については、心の主体性を保持する修養論を提示し、心を体認する陽明学的解釈を示すと指摘している。君主が徳をもって仁政を施すべきであると提唱する徳治主義者である一方で、人材登用論においては、明代陽明学派の李贄のように、道德を絶対視することに反対し、現実問題を解決する政治的能力を重視する見解を示すことを指摘している。

要するに、蕃山は朱子学と陽明学に固執せず、自分の学問に有益な見解を受け入れて、学問の実用性を重視しており、比較的に自由な思想を持っていたと指摘している。